

# 生誕150年 ロシア最後の ロマンティスト “ラフマニノフ” 第1回

## プログラム

今年にはロシア生まれで、後にアメリカに亡命した大作曲家ラフマニノフの生誕150年の記念の年に当たります。そこで、チャイコフスキーの影響を強く受け、最大の後継者として様々な分野で作品を残した“ロシア最後のロマンティスト”ラフマニノフを2回に分けて特集します。

セルгей・ヴァシリエヴィチ・ラフマニノフは1873年4月1日、ロシアのノヴゴロド州オネグで生まれました。ラフマニノフの家は由緒あるロシア貴族で、父は軍人でしたがアマチュアのピアニストとして知られた存在で、母はピアノを弾く教養高い婦人でした。4歳の時から母についてピアノを学び始めたラフマニノフは9歳でペテルブルク音楽院の幼児過程に入学、12歳でモスクワ音楽院に進み、スヴェレフにピアノを、アレンスキーとタニエエフに作曲法と和声学を学びました。在学中から作曲を始めていましたが、1891年18歳の時に完成したピアノ協奏曲第1番は作品1として出版、音楽院の卒業作品として書いた歌劇「アレコ」が金メダルの賞を得て卒業すると、一躍注目される存在となりました。モスクワ音楽院を卒業した翌1892年、5曲からなるピアノ曲集『幻想的小品集』を作曲。第2曲の前奏曲嬰ハ短調が特に評判となり、ラフマニノフの名を一気に高めました。1892年ラフマニノフ自身のピアノで初演され、音楽院の師であるアントン・アレンスキーに献呈されました。クレムリン宮殿の鐘にインスピレーションを得たと言われる冒頭が印象的で、ラフマニノフの最もよく知られたピアノ曲として、演奏される機会の多い名曲です。1893年敬愛したチャイコフスキーの死を悼んでピアノ三重奏曲を作曲、1895年には22歳の時に交響曲第1番を作曲、97年にグラスノフの指揮で初演されますが、演奏の不完全さもあり記録的な大失敗に終わり、強度の神経衰弱と自信喪失から作曲が出来ない状態に陥りました。これを救ったのが精神科医のニコライ・ダール博士で、治療によって創作意欲を回復したラフマニノフは、1901年にピアノ協奏曲第2番を完成、モスクワでラフマニノフ自身のピアノで初演されると、大成功を収め、これが名誉あるグリンカ賞を受賞し、この作品で作曲家としての名声を確立しました。それから約5年後の1906年の秋、ラフマニノフは健康上の理由や心の安らぎを求めてモスクワを離れ、妻と幼児を連れて、ドレスデンで作曲に没頭することにしました。その成果の現れが交響曲第2番ホ短調です。1908年1月26日、ラフマニノフ自身の指揮でペテルブルクで初演されると、期待をかけなかったにもかかわらず成功を収め、その年のグリンカ賞を受賞、作曲家タニエエフに捧げられました。しかし初演後、曲が長過ぎるという風評が立ち、最初に出版された版は一部カットされた短縮版で、オリジナル完全版は1947年に出版されますが、定着したのは生誕100年の1973年頃からでした。古典的な形式を用いながら、息の長いロマンティックな情感、強壮なダイナミズムを持ち、特に第3楽章はラフマニノフの抒情音楽の頂点を示すもので、近年特に人気の高い名曲となっています。1909年までドレスデンで創作に打ち込んだラフマニノフはここでアメリカへの演奏旅行のためにピアノ協奏曲第3番ニ短調を作曲しました。モスクワに戻って1909年9月に全曲を完成させた後、その年の11月28日、ラフマニノフ自身のピアノとウォルター・ダムロッシュ指揮ニューヨーク交響楽団によってカーネギーホールで初演され、作品は当時の巨匠ヨーゼフ・ホフマンに献呈されました。有名な第2番より一層複雑になり洗練されていますが、高度な技術を必要とし、憂いを帯びたロシア的な哀愁も魅力に溢れています。親しみやすさでは第2番に一步譲りますが、ラフマニノフを代表する傑作のひとつです。(中川)

\*\*\*\*\*

### セルгей・ラフマニノフ (1873~1943):

#### ピアノ協奏曲第3番ニ短調op.30

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・タント 第2楽章 アダージョ 第3楽章 アツラ・プレーヴェ

エフゲニー・キーシン (ピアノ)

ズービン・メータ指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1996.4.13 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

#### 前奏曲嬰ハ短調op.3の2 (“幻想的小品集”第2曲)

エフゲニー・キーシン (ピアノ)

(1996.4.13 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

\*\*\* 休憩 \*\*\*

#### 交響曲第2番ホ短調op.27

第1楽章 ラルゴー アレグロ・モデラート 第2楽章 アレグロ・モルト

第3楽章 アダージョ

第4楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ

アンドレ・プレヴィン指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

(1992.10.18 ウィーン・ムジークフェラインザールでのLive)